

はじめに

●考古学は、旧石器捏造事件から、なにも学ばなかったのか？●

国立歴史民俗博物館研究グループの、炭素14年代測定法による「箸墓Ⅱ卑弥呼の墓説」の、学界での評価
「箸墓は卑弥呼の墓である。」こんな説を、『朝日新聞』の渡辺延志記者が、二〇〇九年五月二十九日（金）の『朝日新聞』朝刊一面の記事で報じた。『朝日新聞』がとりあげているのならということ、他の新聞、NHKテレビのニュース、ラジオも、その日の夕刊以後などいっせいにとりあげ、大さわぎとなった。

その内容は、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略す）の研究グループが、「炭素14年代測定法」という「科学的な方法」を用いて、奈良県桜井市にある箸墓古墳が、ほぼ邪馬台国の女王卑弥呼が死んだとされる西暦二四〇～二六〇年ごろに築造されたことが推定できた、と発表した、というものである。

しかし、この情報は、歴博の研究グループが思いこんだ説を宣伝・PRするためのもので、まったくなんの根拠もなく、かつ、誤ったものであった。

誤りである理由・根拠などは、拙著『邪馬台国Ⅱ畿内説』「箸墓Ⅱ卑弥呼の墓説」の虚妄を衝く！（宝島社新書、宝島社、二〇〇九年刊）や、私の編集している雑誌『季刊邪馬台国』100号～105号に、ややくわしくのべられている。

また、この本の「第3章」でも、それらとは別の観点から、ややくわしく議論する。

二〇一〇年の三月二十七日（土）に、大阪大学での、日本情報考古学会で、「炭素14年代法と箸墓古墳の

諸問題」というテーマで、シンポジウムが開かれている。

そこでは、歴博発表の内容が、ほとんど全面的に否定されている。歴博発表は、方法も結論も、誤っていると判断されているのである。

日本情報考古学会は、統計学者で同志社大学教授の村上征勝むらかみまさかつ氏が会長で、理系の人の発表や、コンピュータによる考古学的データ処理などの発表も多く行なわれている。炭素14年代測定法などの検討には、もっともふさわしい学会といえる。

歴博グループが発表を行なった日本考古学協会は、旧石器時代の考古学から、歴史時代にはいつてからの考古学までもあつかう一般的な考古学会である。

専門性において、炭素14年代測定法のような問題を十分検討するためには、かならずしもふさわしい学会とはいえない。かつ、日本考古学協会での歴博の発表は、いわゆる「研究発表」である。事前の審査はない。発表するだけであれば、日本考古学協会の会員であれば、だれでも発表できるものである。発表時間は、五分程度の質疑応答をふくめて二十五分という短いものである。十分に内容を、検討できるようなものではなかった。

それを、事前にリークしてマスコミ発表したものであった。

歴博の発表は、「学会で発表しました」という実績づくり、マスコミ発表のための、アライバイづくりであったようなところがある。

そして、日本情報考古学会でのシンポジウムなどは、専門性の高さゆえであろうか、パブリシティ活動（組織体が、みずからに有利な情報を、マスメディアに提供する活動）をとくに行なっていないためであろうか、マスメディアでは報道されていない。

日本情報考古学会の事務局では、「炭素14年代法と箸墓古墳の諸問題」のシンポジウムを開催するにあたり、歴博の研究グループの各メンバーに、パネル・ディスカッション（討議すべき問題について、数人の対立意見の代表者が、聴衆のまえで行なう討議）に、パネラー（討議を行なう人）として出席していただくよう熱心に交渉されたときく。しかし、歴博グループのだけ一人として、パネラーとして出席することを、引きつけられなかったときく。

どうやら、私のように、データにもとづき、歴博発表の批判を表明している人物が、パネラーとして出席することに、抵抗があったようである。

しかし、歴博の研究は、多額の国費をつかって行なわれた研究である。かつ、マスコミで、あれだけ大々的に事前発表したのであるから、シンポジウムに出席し、反対意見に対しては、客観的根拠にもとづいて、正々堂々と論駁^{ろんぱく}すべきである。その責任があるはずである。

マスコミ発表のみに専念するような方法、マスコミがとりあげれば、それで事たれりとするような方法は、批判をうけてもしかたがない。

それだけでは、科学的、学問的には、なんらの証明にもならないからである。

日本情報考古学会のシンポジウムでは、名古屋大学年代測定総合センターの中村俊夫氏、数理考古学者の新井宏氏、樫原考古学研究所の関川尚功氏^{ひまよし}、そして、私も、パネラーとして参加した。

とくに、新井宏氏は、詳細な根拠をあげて、歴博説の誤りを指摘された。

会場からは、まったくなんらの異論的質問などが提出されることはなかった。パネラーへの賛意は、表明された。

これは、二〇〇九年五月三十一日に、早稲田大学で行なわれた日本考古学協会での、歴博研究グループの

発表のさいの情況とは、まったく異なる。

その情況は、鷺崎弘朋氏わしざきひろともが、同日のブログで、つぎのように記しておられる。

「本日三十一日、早稲田大学会場にて、第75回日本考古学協会総会の研究発表会が行われ、私（鷺崎氏）も出席しました。国立歴史民俗博物館が二十九日に朝日新聞で発表した『放射性炭素14年代の測定結果』によれば、箸墓の築造年代は二四〇〇〜二六〇年で、卑弥呼の墓』の、学会での正式発表です。

一言で言うと、『総スカン』でした。（中略）発表内容も、一月二十五日に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で開催された報告会（私も出席）と何ら変わらない内容でした。

今回発表では、考古学協会事務局が時間の関係で打ち切りを宣言しましたが、最後の締めくくりが象徴的です。

『今日の雰囲気から分るように、これで考古学会のコンセンサスがとれたとはとても言えない、むしろ逆である。来られている新聞社にお願いしたい。今回も事前にリークされ朝日新聞の一面で報道された。我々考古学会は旧石器捏造事件の経験を持つ。新聞・報道各社は今日の状況を踏まえて報道してもらいたい』、これが全てを物語っている。」

くりかえされる大本営発表

かつて、旧石器捏造事件というのがあった。

教科書にまでのった旧石器遺跡が、捏造であったというのだ。

この旧石器捏造事件から学んで、軌道修正をしたマスコミもあった。しかし、考古学のリーダーたち（と
いうよりも、マスコミ便乗主義の考古学者たち）は、ほとんど、なにも学ぶことは、なかったようである。

同じような事件が、なんどもくりかえされている。ほとんど、狼少年というべきである。

旧石器捏造事件がおきたとき、なぜ、このような事件がおきたかについて、つぎのような反省の弁がのべられた。

すなわち、『立花隆、「旧石器ねつ造」事件を追う』（朝日新聞社、二〇〇一年刊）のなかで、東京大学の考古学者、安斎正人氏は、つぎのようにのべている。

「旧石器を捏造した」藤村さんだけじゃなくて彼ら全体がジャーナリズムのほうに向いてましたよ。（藤村氏をサポートした）鎌田さん自身言っているとおり、取り上げてくれないと調査費が出ない。どれだけ広報活動するかっていうことが大事。ですから発掘したとき、学術誌に載せるよりも、メディアにいち早く出す。しかもそのメディアが、一面で書いてくれるように。」

同じ本のなかで、国士舘大学の^{おおぬまかつひこ}大沼克彦氏は、つぎのようにのべる。

「今日まで、旧石器研究者が相互批判を通じた歴史研究という学問追求の態度を捨て、自説を溺愛し、自説を世間に説得させるためには手段を選ばずという態度に陥ってきた側面がある。」

この点に関連して、私はマスコミのあり方にも異議を唱えたい。今日のマスコミ報道には、研究者の意図的な報告を十分な吟味もせずに無批判的にセンセーショナルに取り上げる傾向がある。視聴率主義に起因するのだろうか、きわめて危険な傾向である。」

そしていま、マスコミ便乗派の「邪馬台国Ⅱ畿内説」の人々は、藤村新一氏や鎌田俊昭氏と、基本的に、同じような方法を用いている。

学問的、科学的証明や検証よりも、まず、広報活動のほうが大事であると考ええる。ジャーナリズムのほうに顔をむけ、学術誌に載せるよりも、メディアにいち早く出す。そして、そのメデ

イアが、一面で書いてくれるように工夫する。

畿内説を溺愛し、その説を世間に説得させるためには、手段を選ぶ必要はないと考える。直接結びつかなくとも、邪馬台国問題にすこしでもかすったようにみえたら、邪馬台国と結びつけて、マスコミ宣伝の拳にする。そして、断定的な意見を発表する。「かすったら畿内説」主義である。

「邪馬台国Ⅱ畿内説」という自説を溺愛するためなのか、それとも、国家財政逼迫ひつぱくのおり、助成金や調査費を獲得するためなのか。あるいは、その両方なのか。正当な学問的、科学的手つづきから逸脱した方法にもつばらうたえている。

ほとんど極端に、この方法にたよっている。他の学問、科学では例をみない。

この方法だけを見ても、考古学が、信用すべからざる方向に動いている危険性を読みとるべきである。

古代の真実をあきらかにするという大きな目標は、どこかにいつてしまっている。古代の真実をあきらかにするためには、学問的、科学的に正しい検討の手つづきによらなければならない。そのことが、どこかへ行ってしまうている。

事件にたとえるならば、取り調べ官が、功名心からかれて、正規の検証・手つづきを経していないような状況で、犯人がきまったと、やたらに報道にもちこむようなものである。冤罪えんざいを生みやすい構造になっている。確実でないことを、あたかも確実な結果が得られたかのように、マスコミで断言し、喧伝する。第二次世界大戦中、戦いに負けても負けても、日本の大本営は、勝った、勝ったと、発表しつづけた。その大本営発表が、いまかりかえされている。マスコミがとりあげれば、それで「証明」が成功したと勘ちがいをする。その結果、証明が、ますます粗雑になって行く。